

第2章 授業で勝負する

第5節 読まない・書かない教師に明日はない

いささか挑発的なタイトルですが、読まない・書かない教師には今日を超える明日はないという意味です。第1節「理論的ブレインを持つ」と一対のものとして読んでいただきたいと思います。

■読まない・書かない教師に明日はない■

1 教育書は「はじめ」と「おわり」が大事

教師って、意外なほど本を読まない。しかし、子どもには強制的に読書を勧める。詐欺師みたいなもんだ。

子どもに読書を勧める時、「世界が広がる」「未知のものに出合える」「自分とは違った考え・見方に出合える」などと言う。その言葉を、そっくり自分に返してみよう。

私は文庫・新書ファンで、理由は安価だからだ。購入する本はエッセー、歴史書、山岳小説など、教育書以外のものも多い。

特に新書は、みなさんにもお薦めしたい。1冊700～800円程度で買えるし、ページ数も手頃で鞆に入れて持ち歩きやすい。内容はと言うと、これが結構濃密で、それでいて専門書に比べれば平易だ。知的財産を蓄える入門書としては、願ったり叶ったりだと思う。

さて、教育書。

教育書は、子どもへの読書の勧めと同様の理由で、経験主義に陥らないためにも大事だ。教師は意外なほど本を読まないと書いたが、教育のハウツー本は相当好きだ。それも、そのまま使えるページが大好きだ。

「まなぶ」の語源は「まねぶ(真似ぶ)」だとされている。優れた実践を真似ることは、まなびの大事な一歩だと思う。ところで、「真似る」とことと「コピーす

る」ことは同じだろうか。近いには違いないが、微妙に違うように私は思う。そして、「真似る」ことは大事だが、「コピーする」ことはいかなものかと私は考えている。両者はどう違うのか。

「コピーする」というのは、字義のごとく、そっくりそのままいただくことだ。文字通り、その部分をコピーして使っている人も見かける。それは“いかなものか”とは思いますが、全否定はしない。若い時には、それもアリだ。しかし、これを続けていくと、やがて夥しい数のコピーの山に埋もれて過ごすことになる――かもしれない。

「真似る」というのは、基本的には先例をなぞるのだが、そこにほんのちよつとその人らしさが入ったり、クラスの子どもたちの実態を踏まえた工夫が加わったりする――という語感のニュアンスがある。実はこの微妙な違いが大事で、それによってバリエーションがウンと広がる可能性がある。ワザは、こうして増やしていくものだ。

「ワザ」と言えるレベルのものを身につけるには、それを支えている理論を学ぶ必要がある。理論を身につけることで、応用力が育つ。さらには、多くのワザをしまっておく“引き出し”の整理ができ、必要な時に必要なワザを取り出せるようになる。

理論と言うと小難しく思われるだろうが、専門書がなくてもハウツー本でも理論を学べる。それは、大抵の場合、「はじめに(序章)」と「おわりに(最終章)」に書かれている。そう、殆どの場合、パスされているページだ。

例えば、15年あまり前に奈良県内の学校現場で大好評だったハウツー本に、『わたし 出会い 発見』(大阪府同和教育研究協議会編 1996年)というのがある。体験的参加型の人権教育プログラムが数多く紹介されており、そのまま教室の実践に使えたのが好評の理由だ。この本の「はじめ」では、監修の平沢安政さん(大阪大学)と森実さん(大阪教育大学)が、人権教育の大きな流れの中にこの本を位置づけている。また、「おわり」では、大同教事務局が、この本の内容を理論的に補足している。いずれも短文で、十分に意を尽くしているとは言い難いが、それでもこれらをきちんと読んだ上でプログラムが実践されていたら、参加型プログラムをすること＝人権教育の如き珍風景にはならなかったろうに…。

繰り返しになるが、教育書は、「はじめ」と「おわり」が大事だ。読まない教師に、今日を超える明日はない。

2 実践記録のススメ

読まない教師に明日がないように、書かない教師にも明日がない。

教師こそ書き綴る生活を

「教育雑記帳」No.16(1986.5.7)より

ぼくら、子どもには日記も含めてかなり日常的に書くことを強要していますね。ところでそういうぼくら自身がどれほどよく綴ってるのでしょうか。ぼくは、教師こそ書き綴らなあかんと思えます。子どもの心動かされる表現、あるいは本の一節、すぐれた講演の感想、子どもに思うこと、授業や取り組みの記録…とにかく日常的に書くことです。書くことで思いが深まるし、感性が研ぎ澄まされてきます。よく考える教師にもなります。毎日が忙しく、あわただしく過ぎていきます。そんな毎日だからこそ、3分か5分の時間を大事にしたいと思うのです。1年の終わりにその年の学級づくりの記録を残していける、そんな日常的な実践と、日常的な書き綴る生活のある教師でありたいです。

1986年5月、私は3度目の卒業生を送り出したばかりの30歳だった。それから29年近くが過ぎた。思いは、30歳の頃と変わらない。

私には、当時から自らに課していることがある。それは、毎年1本、研究大会で発表できるレベルの同和教育(人権教育)実践記録を書くことだ。裏を返せば、実践記録としてまとめられるような実践をやり続けるということでもある。教室を離れた9年間は理屈っぽい文章しか書けなかったが、その間を除けば違わず^{たが}続けている。テーマは、年度によって障害児教育であったり、部落問題学習であったり、平和学習であったり、環境問題であったり、学力であったりしたが。

いかに書き綴るのか。書き綴ることにどんな意味があるのか。

例えば、1年間の総合の取り組みをまとめるとしよう。

まずは、時系列に取り組みを書き連ねよう。研究論文とか報告レポートなどということを一切意識せず、したことを順番に並べるだけでいい。取り組みの1つ1つが「目次」の見出しで、それぞれについて、学級通信の記事や子どもの日記なども使って内容を肉付けしていけばそれでよい。記憶の記録化だ。通常の場合、このカタチで保存しておく。

これだけでも、十分に意味がある。書き綴る過程で取り組みの意味づけが明確になることもあるし、逆に不十分さが見えてくることもある。気づいていなかった

た子どもの変容が浮き彫りになってくることもある。それらのことが、次へのエネルギー源にもなる。

思いの強い取り組みであったり、報告レポートなどの必要に迫られた時は、1ステップ上の記録に練り直そう。ここが、このハナシのキモだ。

余談だが、人権教育研究大会の報告の中には、時系列の取り組みの羅列というものもある。しかし、これはおよそレポートに値しない。国分一太郎さんが、あるところに「若い先生たちの授業記録がダラダラと長いばかりで、何を言いたいかが分からない」といったことを書いておられた。

取り組みの中である子の変容が見られたのなら、その子の姿を追うカタチの構成に変えてみよう。この場合、その時々の子どもを語る切り口として、取り組みが位置付くことになる。

ある研究者の理論を仮説とした取り組みなら、仮説－実践－検証といったカタチの構成に変え、1つ1つの取り組みをその中に位置づけてみよう。

つまり、取り組みをある明確な切り口で切り取ることで、意図や成果や課題が明確になっていく(余談ついでに、研究大会で参加者が期待しているのはこの部分の共有なのだ)。こうして論理的に実践を整理できるようになると、次の取り組みを論理的に組み立てられるようになっていく。チカラのある教師というのは、こうした財産を多く持っている教師だ。

書くことで見えてきた成果は、自信となりやがては確信となっていく。書くことで見えてきた課題は、ステップアップの糸口となる。書くことで見えてきた「視点」は、教材や子どもを観るチカラとなる。書くことで身につけた構成力は、教育実践やクラスづくりを組み立てるチカラとなる。書くことで――教師はのびる。

ここからは余録になる。私の研究大会デビューは教員になって2年目の秋で、教育論文デビューは4年目の夏だった。ここに初論文(1982.8)を再録し、「まあその程度のものか」と安堵の材料を提供したい。

さらにオマケで、ラストレポートになる「世界遺産学習全国サミット in なら」(2014.11.9)の報告原稿を添付。

私の歩み、この1年

—書くことを通して人間解放の学力を—

1 はじめに

私の勤務する〇〇〇小学校は、〇〇市のほぼ中央に位置し、商店街や農山村といった多様な地域から通学する児童をかかえている。学校は100年以上の歴史を有するが、校舎は新築移転され、今年で3年目を迎える。校区には被差別部落をふくみ、私の学級では部落の児童の学級全体に対する割合は25%をしめている。

昭和54・55年度には県教育委員会の研究指定校として、「意欲的に取り組む子どもを育てる学習指導」というテーマで研修を重ねた。国語科では、作文の指導を通して子どもの思考力を高める。すなわち、集団の中で自分を見つめ、高め、そして生活意識を深め、確かなものにしていく子どもを育てることを目指してきた。こうした研修の中で私が学んできたことを、この1年間の私のささやかな実践をもとにまとめてみたいと思う。

「お母さんのしんどさ」という作文がある。(資料1—第1章第7節の56～57ページ参照—)作者であるM子が母親の経営する店で手伝いをしている。自分の仕事を終え、母親の働きぶりを見ている。心配になってくる。そして、「しんどくないの。」と声をかける。母親は、「しんどくない。」と答える。どこにでもありそうな話である。しかし、この先が違う。

私は、お母さんは私になにもてつかわしたくなかったのかなあと思った。それで、お母さんはしんどいながらも仕事を続けている。それで、私は、ちょっとぐらいお母さんのことも考えて、ちょっとでもお母さんの仕事を手伝おうという気持ちになって、お母さんの作った料理を私がお客さんに持っていった。私は、お客さんに料理を持っていったあと、台所にいってお母さんの顔を見ると、お母さんの顔は光ったようにうれしそうな顔をしていたので、私はよろこんでいた。

作者のこの「思い」を生んだのは、母親の仕事を見つめる作者の「目」と「心」である。そして、思うだけでなく、実際に働いている。その行為が母親の「光ったようにうれしそうな顔」を生んだのである。

私はこの作品が好きである。表現力はすぐれているとは言い難い。上手な文章では決してない。しかし、それでも私はこれが好きである。私のク

ラスのすべての子どもたちに、こんなものの見方や感じ方ができる力をつけてやりたいと思う。そして、思ったことによって、自分の生き方を変えていく行動力をつけてやりたいと思う。さらに、そうした出来事をきちんと書きつづれる力をつけてやりたいと思う。

2 くらしを見つめる

父母のくらしを見つめ、書きつづることを私は大事にする。それも消費生活ではなく、労働を大事にする。

父や母のくらしを書くことを大事にするのは、1つは一家の柱である父母への認識を確かにし、2つめには、その父母への認識を通して自分の生き方というものを考えるためである。

父母のくらしを知るには、父母が働いている場面を自分の目で見て、確かめて書ければ1番いい。しかし、多くの場合外へ働きに出ているし、家で働いていても何気なく生活していると案外見過ごしてしまっていることが多いのである。

昨年(5年生)の6月、父の日を前にして父親のことを日記に書いてくるように課題を出したことがある。数日続けるうちに、「うちのお父さんはやさしい」「こわい」「強い」「ふだんはやさしいがおこるとこわい」「一生けんめい働いている」「日本一だと思ふ」等々の文章が山のようにたまった。そこには抽象的な言葉で概念的にとらえられた父親はあっても、「どうやさしいのか」「どんなに働いているのか」という具体的な生活は何ら語られていない。父親がどこでどんな仕事をしているかも知らない子がいるのである。担任して2か月余りの時期であるので、私に対する警戒感もあったのだろうが、ここに5年生の児童のものを見る目の一端を見ることができると思う。

こうした状況の中で、「仕事から帰ってきた父母を5分間じっと見つめよう。そして、その間の会話、手足の動き、表情などを目に見えた通りに、耳に聞こえた通りに書こう」ということを指導した。これには2つの意味がある。1つは、真実の一部分を書くことを通して子どもものものを見る目を育てていくということ。他の1つは、仕事から疲れて帰ってくる親の姿に接することにより、そこから親の労働に目を向けさせていくという次の段階へのステップにすることである。

ここにN1子の日記がある。(N1子は被差別部落の子である。)(資料2

—第1章第7節の54ページ参照—)文章としても不十分であるし、日記の中で作者が第三者になってしまっている。つまり、父の疲れている姿を見ている作者の生活はどこにもない。それでも何でもこれはN₁子が父親について語った最初の日記なのである。抽象後を連ねた日記が続く中で、私の何回かの赤ペンとクラスの仲間の日記を紹介されることにより初めて父親を語り出したのである。私はこれをきっかけにして、労働そのものにまで目を向けさせていきたいと思った。

N₁子は父親のことを話したがらない。N₁子の父は、大阪でゴミの収集車に乗っている。現業公務員に対する偏見は社会的に存在する。だからこそN₁子は語らないのである。しかし、N₁子の家計は間違いなくこの父親の労働によって支えられているのであり、N₁子がこの現実を正面から見つめることなくして彼女の成長はありえないと考えるのだ。

この取り組みを進める中で、私には忘れられない出来事があった。それは次のような日記に出会ったことだ。

今日のお父さんは少しちがう。なぜならば、今日、ぼくのおねえちゃんの運動会だったので、その運動会のことばかりおねえちゃんと話していた。

ぼくにはぜんぜん話しかけない。

それで、5分間お父さんを見つめていると、お父さんに、

「はよ勉強せい。」

とおこられた。

作者(S男)は、いつもと違う父を一生懸命見つめていたのだろう。私は、自分の配慮のなさはずかしく思った。そしてこれを笑い話に終わらせてはなるまいと、急いで家庭に協力を求めるプリントを刷った。

そんなことがあって、N₁子の家にも足を運んだ。やがて、N₁子は父親からの聞き取りをはじめ。知ることによって見る目も目的意識をもつようになる。

そのようにして書かれたのが資料3(第1章第7節の55ページ参照)にある文章である。(この子には文章表現の力をきちんとつけてやらなければならないという大きな課題があるが、ここではそれにはふれない。)日記の中に見られた「しんどさ」の正体がおぼろげにでも見えてきた。新しい事実の「発見」も見られる。

「大阪で働く前は、電気屋で働いていた」父親が、年をとってきからどうして仕事をかわったのだろう。それも、「大阪で働くのは、電気屋で働くよりずっと『ふう。』というぐらいつかれる仕事」だというのに。このほりさげを是非したいと思う。それを考えることは、被差別の中で生

きるN₁子の生き方を考えることにもなるからだ。

K子の家庭は両親とK子と2つ年下の弟の4人家族である。両親は夕方になると自分の経営する店に出かけていく。帰りは午前1時から2時ごろである。その間、大学生がるす番に来るようだが9時ごろには帰ってしまう。姉弟2人の夜が続くのである。K子には負担でもあるし、寂しいようでもある。そのため夕方遅くまで外で遊んで帰る。帰ったところには両親はいない。そんな日もめずらしくはなかったようだ。(資料4-略一)

私がK子と話したころからK子の目が両親に向けられるようになってきた。仕事場に出かけ、働いている姿にも接したようだし、電話から聞こえてくる「音」から店の様子を想像したりもしている。やがてその目は、「どうしてこんなしんどい仕事をするようになったのだろう」というところに向けられていった。そして、母親の生活歴をたどるようになる。さらにそれを書きつづっていく取り組みの中でK子は変容をとげていった。「母のくらし」と題する作文の中で見ていこう。

“店に電話をしたときのこと”をこう書いている。

母がでるまでまっていると、いろいろな音がきこえてくる。音楽がながれている。

「いらっしゃい。」

「ありがとうございました。」

「どうや、こうや、アハハ。」

という声がきこえてくる。その横で、母もわらっているみたいだ。お店にいらなくても声や音だけで、様子がうかんでくる。お店の中は、とってもさわいでいるみたいだ。母もわらったりしているけど、手をはやくあっちこっち動かして、お客さんにたのまれたものを作っているだろう。だが、お客さんがしゃべりかけてきているのに、むしするわけにはいかない。いろんな話をされるだろう。うれしかった話、いやだった話。うれしかった話をすれば、お客さんも母もたのしいだろう。いやだった話をすれば、母はききづらいかもしれないけど、お客さんはすつとするだろう。母はお客さんにたのまれたものを作るだけじゃなくて、お客さんの心をすつとさせてあげているんだな。

どうだろうか。K子が受話器の向こう側にいる母親の向ける目と心は。こうした母への思いが、母の今までの生活を聞きだす力になったのである。

どうして、こんな苦しい仕事にかわらなければならなかったのだろう。今の仕事は、私が1年生のと中ぐらいからはじめた。天理にきたのも1年生のと中だった。

それまでは奈良にいて、父はふつうのサラリーマンだった。母もつとめていた。

奈良に住む前は、かごしまに住んでいて、父と母は、メナードけしょう品の仕事をしていた。そのときは、生活がくるしかったそうだった。私が赤ちゃんのときだから、1階で仕事をしていると、私が2階で大きな声でなくて、いつも1階、2階とのぼったりおりたりしていたそうだった。その生活の苦しいときに、父は交通事故で入院したそうだった。それで、母1人で、まだ赤ちゃんの私と弟をそだてていけないので、私だけ、かごしまから天理のおじいちゃんのところへひきとられたのだそうだった。その時は、わたしも母も、すごくないたそうだった。私はまったく覚えていない。

かごしまでやっていたメナードけしょう品から、奈良に来たのは、生活が苦しかったからだろう。奈良から天理に来たのは、家をひっこししなければならなくなったからだろう。

こうして母の生活や労働がわかってくることにより、ふだんは気づかないような小さなことでも決して見過ごさなくなってくるものである。

学校から早く帰ってきて、母がけしょうをしているのを見ていたら、かばんに薬が入っていた。わたしは、

「あっ。」

と思った。そして、私は母に、

「なに、そのくすり。」

と聞いた。母は、

「うん、ちょっとしんどいねん。」

と言った。私は、今までこんなこと、全然知らなかった。ときどき、横になっているときがあったけど、元気だとばかり思っていた。母が病院など行くようになったのは、仕事があんまりきついせいだろう。

さらにK子は母親の生活を分析する。事実を知ることが次の「思い」を生むのである。

これじゃ病気になるのもあたりまえかもしれないけど、病気になってほしくない。私だって、母の手伝いを少しでも多くしてあげれば、病気だってならないかもしれない。もっと多くしてあげれば、絶対病気なんかしない。

この「思い」が次の「行動」を生むエネルギーになっていくのである。(全文は資料5参照—略—)

この作文を11月18日(指定研究の発表の日)の授業に使いたいと思って、K子の母親にその了解を求めに行ったときのことである。私(K子の母)は、自分の生活や仕事ははずかしいとは思っていません。自分なりに

必死になって働いてこの子たちを育てています。この子(K子)にも親の仕事ははずかしいものと思わせない様に話して聞かせています。ですから、どうぞみんなの前へ出して下さい。そんなことを静かに話される母親の言葉に、私は人が生きるということを教えられたような気がした。

最後にK子のその後にふれねばならない。K子の帰りが早くなった時期もあった。しかし、今年度になってからはまた日が暮れるまで帰宅しないことが多いようである。(親の進学熱に対する反発もあるようだが。)結果的には、一連の取り組みが彼女自身の問題になりきってなかったのである。書くことが万能だとは言わない。だが、それが書くことの限界だと簡単に言い切ることもできないと思う。作文の中にこういう記述がある。「私はどんなことができるかとさっそく考えた。まあ、お手伝いはするけど、もっと母が助かることってないかなと考えた。」家族の1員としての役わりというとき、本当に大事にしなければならないのは毎日続ける「手伝い」なのだ。ところがK子はそのことを軽く流してしまった。私自身が、この部分を問題にし、彼女の生活に切りこんでいっていたなら、彼女の生活を真に変革できる糸口になっていたかもしれないと思うのである。

クラス全体の様子について言えば、消費生活が話題の中心になるということとはほとんどなくなった。親を見つめる視点が変わった。もっと言えばくらしを見る視点が変わってきたと言えると思う。時々、子どもの持っているあまりにも透明な優しさにドキッとさせられることがある。しかし、そのことが自分の生き方を、行動を変革していくという所までは容易に行けないでいるのが現実である。

3 なかまを見つめる

子どもはひとりひとりがそれぞれ別個のものとして存在しているのではない。学級であれば、その学級集団の中の個人として存在するのである。子どもは集団の中で育つと言われる。個人の日記を文集に書き学級集団にかえていくのも、個人の問題を個人の責任にするのではなく、集団の問題としてとらえようとするからである。なかまの言葉、行動、思いに心を向け、なかまにかかわって生きていこうとする子どもにしたいと思う。それが個々を成長させることにもなるのだから。

K男という子がいる。彼は人の気にすることを言ったり、人を責めたりすることが多く、評判はあまりよくない。資料6・7(一略一)に見られるような問題はなかば日常化している。もちろん、担任である私は彼をよん

で話をするし、親だって何よりも彼のそうした性格上の問題を1番気にしているのだ。しかしながらなかなか前進しないのである。学級のソフトボール大会の練習の中でも同様のトラブルがあった。しかしその時はいまままでにない「事件」が起こった。多くの女子と1部の男子がK男の所へ行って「文句を言われるのがかなんね」ということを訴えたのである。その言葉がK男を変えようとしている。(資料8・9—略—)

まわりの「目」というのは容易に変わるものではない。「本当にあいつがかわるんやろか」という疑いの方が先行しているのも事実である。しかし、なかまの声は間違いなくK男を動かしたのである。教師や親の「説教」からは生まれなかった日記が今、彼の手で書かれたのである。子どもは集団の中で育つということを身をもって感じた出来事であった。

希望学級(障害児学級)に通級しているT子は、社会的に存在する差別意識と偏見を前進に受け、学級集団から疎外されている子である。学級のなかまづくりの核になる児童ということになる。

私の学級で事件が起こった。それは、T子の属するグループノートから指摘された。

10月7日 I子

この頃、Tさんは、「Tきん。Tきん。」とみんなにいられていますがみんなどう思いますか？

私はとてもはらが立ちます。Tさんの代本板をなげたり、机にさわっただけできたないといったりすることに。ちっともきたなくなんかないと思います。Tさんも同じ人間です。同じ5の2の生徒です。

4組のMさんもよくいられます。Tさんらは、口には出して言わないけど、とてもはらがたっていると思います。

みんなで言ってる人があったら注意しましょう。

この指摘を受けてT子の文章がつづく。おそらく母親の力を借りたのであろうが、その必死の訴えは心にしみた。

10月11日 T子

私はみんなからTきんといわれます。でも私はがまんをしています。私は口に出してなにもいわないけれどほんとはつらいです。H君がいつもいいます。

「先生ちゅういしてください！」

さらに、10月21日、同じグループのM子は、「Tさんのつくえやせいふくなどを人のつくえの上にこすりつけて『Tきんついた』とみんなに言う。」と具体的な事実を明らかにしていった。

このノートがグループを1巡して私のものに提出されたのは10月22日であった。それまで、私はこうした事実を全く知らなかった。こうして、「問題」は子どもの中から提起され全体の中に出されていった。何度かの学級会の中で、何が問題なのかがしだいに明らかになってきた。そして、それを全校集会の場で訴えていくことにした。(資料10・11-略一)

全校集会で訴えることを通して子どもたちは一定の成長をとげたと思う。(資料12-略一)しかし、それは「外なる差別」に気付くようになったということであって、自分自身の「内なる差別」とたたかう力にはならなかった。

T子に対するまわりの接し方が変わっていった。「みんなよりやさしく」とか「特別扱い」という言葉で指摘された。そして、人権とか平等ということについて議論を重ねた。(資料13-略一)

3学期をむかえて、私たちの「その後」を再点検する取り組みをはじめた。(資料14-略一)「内なる差別」とたたかい自分の生き方を変えていくことなしに「前進」はあり得ないからである。それにはまず、子どもたちの中にある「既成の概念」をくだかなければならない。そこで、1月31日、希望学級の学習の様子を見せてもらうことにした。これは危険な1面を持っていた。「やっぱりあいつらはあかん」と思わせたら、差別の拡大になるからである。幸いにもそれは杞憂に終わった。子どもたちは、希望学級の子たちの学習する姿に接し、真実なものに目を開かれることによって、今までの自分がより鮮明に見えてきたように思う。

希望学級なんて、どうせろくなことをやってないだろう。3年、4年の勉強とかやってるんだろう。希望学級とは、なにかといえば、あほな学級やと私は思った。私達のきょうしつよりずっとはなれて、3つの教室がある。部屋といえば、6つのつくえと先生につくえがぽつんとおいてある希望学級を私はそう思った。(資料15-略一)

過去の自分のすがたが見えるのは、現在の自分が過去の自分とは変わりつつあるしょうこだ。これが自分を成長させる原動力となるのだ。と私は書いた。そして、過去の自分の姿を具体的な事実、場面の中で明らかにしていきたいと考えた。それが、単に「わかる」だけでなく、「生き方」を変えていくことにつながると思うからである。

さて、子どもたちは希望学級の中で何を学んだのだろうか。ある子はこう書いた。

希望学級の子はいっしょうけんめい勉強をしていた。勉強をわすれな
いで、竹内先生の話をよく聞いて勉強していた。ぼくは今までに希望学
級の子をばかにしていたのかなあとと思った。ぼくは今までTさんをばか

にしたり、あだなをいったりしていた。でも、ほんとうにいったらいけないことがはじめてわかった。

ある子はこう訴えた。

ただ勉強がおくれているだけで、ほかの子は希望学級の子をばかにしたり、いやがらせをしたりします。その子たちは希望学級の子がいっしょうけんめい勉強しているところを見たことがないからだと思います。

(以上、資料16—略—)

既成の、たてまえの概念をくたくたすることはある程度できたように思う。次には、今までの自分の姿を明らかにし、これからの生き方を模索する中で、ほんねの概念を形成していく取り組みをしなければならない。残念ながら、私の力はこどもをそこまで高めるに至ってはいない。(資料17、18、19、20、21、22、23—略—)

○ 4年生の時、Tさんが100点をとったと男の子たちのもっぱらのうわさだった。私は、

「どうせうわさやからうそちゃうか。」

と友だちに言った。

「そうやな、あの子が100点とるわけないやんな。」

友だちが答えた。私もそう思っていた。私らだけでなくだいたいの子がそう思っていたと思う。このころには、それがほんとうだと思ふ子がほとんどいなかったのだ。

○ ある日、トイレに行ったとき、Tさんがはいつてきた。ならんでるのがたいくつだからSさんとドアの所で遊んでいた。そしたら1組の2人が入ってきた。Tさんが出てきた。私が入ろうかなと思って行くと、もう1組の子が入っていた。そして、仕方なしに待っていると残っていた1人の子が、

「Tのあといくのいらんね。」

と言った。私は注意しようと思った。でも出来なかった。きつとたくさんの人がいたからだったと思う。私はそのときにがわらいをした。

○ 遊び時間が終わって教室に入ろうとしたら、中央階段でだれかが私に、「Tきんタッチ。」

といった。私はだれにもタッチはしなかったが、階段にさわられたところを、もう1度いらってつけておいた。

いずれも、具体的に自分の内なる差別を告発している。これ自体がすばらしい成長だと思う。しかし、ここからの前進がないのだ。

資料18にこういう指摘がある。

希望学級にいる時のTさんは、とても大きな声でよくしゃべるし、そ

れにいつもえがおで友だちや先生と日記を読んだり、漢字や算数のどり
るなどをしている。5年2組ではあまりしゃべらないのに希望学級で
あったらよくしゃべるのは、学級があまりにもつめたいからだろう。

つまりこうなのだ。かかわることで「やさしすぎる」とか、「とくべつに
している」などと言われるなら、いっそかかわりをもたず、無視してしま
えというのである。それから4か月をへた今もなお、こうした空気はある。

資料19は、そこからの前進の方途を示唆しているように思える。「集
団の中の1番弱い立場の人に連帯しよう」とか、「疎外されている人の立
場に立って考えよう」とか言うがそれは可能なことだろうか。「人の立場」
など本当に理解できるだろうか。よしんば頭の中で理解できたとして、そ
れが次の行動を生む力を持つだろうか。私はそういう意味でY子の作文が
示唆的だと言うのである。つまり人は自分の人生経験に照らしあわせるこ
とによってしか人の痛みを感じるなどできないのではないかと思う。
それだからこそ、書くという仕事を大事にしたい。自分の生活を具体的な
場面として生き生きと書いていく中で、なかまとのかかわりを具体的な事
実として書いていく中で、そのことに気付いていけるのだと思う。

なかまにかかわって生きる、なかまによりそって生きるというのはどう
いうことだろう。それは、生き方の交流があるということではないだろう
かと私は考えている。「なかまを見つめて生きる」ことにより、「自分の生
き方がどう変わったか」ということが常に問われなければならないと思っ
ている。

書くことは、それ自体が目的ではない。自己変革の道すじであり、過程
である。

こうした視点に立つ時、T子をめぐる私の取り組みは、今やっとスター
トラインに立ったところだという気がする。T子が学級の中で笑顔で話せ
るようになったとき、学級の中で生活することに希望学級にいる時以上に
喜びを感じるようになったとき、私のクラスの取り組みが本物になるんだ
と思う。そうなった時、T子もまわりのみんなもともに1人の人間として
解放されるのだと思う。それまでは、私自身もそして子どもたちも試され
続けるのである。

4 自分を見つめる

「自分をきびしく見つめよ」ということをよく言う。「自分をあまやか
している生活には成長がないんだ」とも言う。

自分をきびしく見つめていると課題が見えてくるし、目標ができる。そして、その目標を達成しようと努力する。努力する人は自分を成長させる人だ。こんなことを、毎日の勉強や読書や体力づくりや家のくらしにかかわって具体的にくり返し話してきた。

6年生になるとそれまでにない問題が出てくる。受験である。

校区大会があった。それぞれの町で6年生が中心になって練習を重ね、大会の日を待つ。ところが受験勉強のために練習に出てこない6年生がいるのである。本当ならば中心になって下学年の子を指導しなければならないに顔さえ出さない。たとえ受験で人との競争に勝てたとしても、それは自分に負けた悲しい姿に見えてならないのだ。資料24(一略一)は、その時の文集だが、I子はそれに対してこんな日記を書いた。

自分は自分、他人は他人なのだから、他人のことなどきにしないで、自分の考えで決めてゆけばいいと思う。フットをしたかったらフットをし、勉強したかったら勉強すればいいと思う。

ふだんは、友達となかよくとか、なかまを大切にとか言っているけど、自分の利益とかかわるぎりぎりのところではこうなるのである。一体何のための学力であり、何のための勉強であろうか。

こんなこともあった。夜、N₂子が表に出ると塾から帰ってくる級友Aの姿が目にとまった。Aは、目があったとたんに顔をかくして腰を90度に曲げて走り去ったという。それを見たN₂子は、それほどまでにしないと受験できないんだなと思って、自分もがんばらんなんと思いつぐ勉強しに行ったというのである。(資料25一略一)

こうした状況は、私の願う「成長」に大きくマイナスに作用する。自分の行動や心を見つめるよりもテストの点数に一喜一憂し、なかまにかかわって生きるよりも、人の上位に立つことを志向し、父母のくらしにかかわるよりも1問でも多くの問題を解いてくれることを親自身が願う。親や地域の関心が「受験」というものに向けられた時、その前に立つ1教師の力などなんと弱いものであろうか。私は自らの非力に腹が立つ。しかし、人間としての成長を願うならば、それに必要な「力」をつけてやらねばならない。そのためには、子どもたちを(そして親をも)「私の側」に引き寄せねばならない。

――以下、原稿用紙14枚分省略。

5 まとめとして

書くといういとなみは、子どもの生活と遊離したところには存在しない。子どもが、自分自身の生活体験にもとづいて、自分の目で見、耳で聞き、手にふれしたものを、自分自身の言葉で書くところに意味があるのである。私が日記を大事にするのもそのためであるし、ものの見方や感じ方、考え方ということを強調するのもそのためである。

しかし、文章を書くこと自体が目的ではない。いくら美辞麗句でかざり立てようとも、生活から遊離したつくり話は書く価値がない。私は絶えず、子どもの書く文章の中で、その子がどう感じ、どう考えたのかということ点を点検するし、それによってその子の生き方や言動がどう変わったのかということは何よりも大事にする。表現、認識と行動の統一を願うからである。

私が、「生活」とか「暮らし」とか言う場合、家での暮らし、友だちとのかかわり合い、学習のこと、自然とのふれ合いなど、生活者である子どもの諸活動全般をさす。そういうあらゆる場面の中で、生きて活動する子どもによりそいながら、書く力を育て、生きる力を育てようというのである。

書く力は、国語科の作文の授業の中だけで保障できるものではない。しかし、国語科のそれも作文の授業が1番責任を負うべき力であることは事実である。作文の授業の中では、「生活文」や「観察文」、「手紙文」など、いろいろな文章の「形」を教えねばならない。私は今、この「形」のことを論じているのではない。いろいろな「形」をとって書かれる文章の「なかみ」のことを論じているのである。

「自由に」書かせることを尊重する。しかし、何でもいいから書いてよいと言うのではない。ねうちのあるものに目を向けさせ、ねうちのある生き方をさせるために、一定の方向性を持たせてやることは教育の大きな仕事だと思う。

私が、「暮らしを見つめる」「なかまを見つめる」「自分を見つめる」と3つに分けて論じてきたことは、それぞれが独立しているものではない。それらは相互に関連しているものであり、本質的にはひとつである。その本質は、書くことを通して、ものを見る目を育て、ものを見る目が変わることによって、生き方を変えていくということである。

ものの見方や感じ方、考え方を育てるのになぜ書かせるか。事実の一端を場面として描写する。それは自分の生活の再現であり、追体験である。これによって、あやふやであったり、あるいはそのままではすぐに忘れて

しまうようなことが確かなものになっていくのである。その過程で自分を振り返ることもあるだろうし、今後を模索することもあるだろう。こうして生活が意識的になっていくのである。

しかし、それだけでは意識変革にしかかなり得ない。書くことはそこまでいい。それ以上の責任を負う必要はないではないかという意見もあるだろう。だが、その結果、「～してほしい。」「～したらいい。」「～したい。」という式の人権作文がどれほど多く生み出されてきたであろうか。それらは確かに文章としてはすばらしかったかもしれない。しかし、意識が変革することによって、自分の生き方（生活のしぐり、行動）がどう変わったのかが追求されていない。自分と遊離した文章は何ともしらじらしいものである。私は、「わかる」ことによって「どう変わったのか」ということが絶えず問題にされなければならないと考えている。自分が自分の生き方をどう変えていったか、変えようと努力したかということを手を自らに問い直すことに、書くことの2つ目の目的があるのである。

文集の中で子どもに語りかける時、私は自らの生きざまを問わねばならなかった。子どもの前で、その文章を読む時、私は私の生きざまに向けられている多くの子どもたちの視線を感じずにはいられなかった。子どもを一人の人間として解放していきたく願って取り組んできた私自身が、一番多くのことを学んでいったように思う。「これまでの1年の歩み」は「これからの1年の歩み」への過程である。

第5回 世界遺産学習全国サミットinなら

2014. 11. 9

伝統芸能体験から伝統文化継承へ ～吐山太鼓踊りに取り組む子どもたち～

1. はじめに

本校は、奈良市の南東部、豊かな自然に囲まれた標高500m前後の大和高原に位置する。かつては農業を生業とする地域であったが、20数年前に始まった宅地開発で校区の

第5回世界遺産学習全国サミット

伝統芸能体験から
伝統文化継承へ
～吐山太鼓踊りに取り組む子どもたち～

奈良市立吐山小学校 草尾佳秀

環境は大きく変化した。そして、在籍児童の大半を占めるに至った団地の子どももピークを過ぎ、今年度からは複式学級編制が導入されている。

吐山には、室町から江戸時代初期が起源とされる雨乞いの太鼓踊りがある。もっとも1967年を最後に「雨乞い」の機会はなく、大きな行事の折などに僅かに演じられるだけであった。踊りの途絶を憂える人々によって1985年に「保存会」が結成され、さらに1994年からは授業の一環として小学生にも教えていただいている。また、2008年に放課後活動の1つとして太鼓踊りクラブが設けられ、現在12名の子どもたちが活動している。

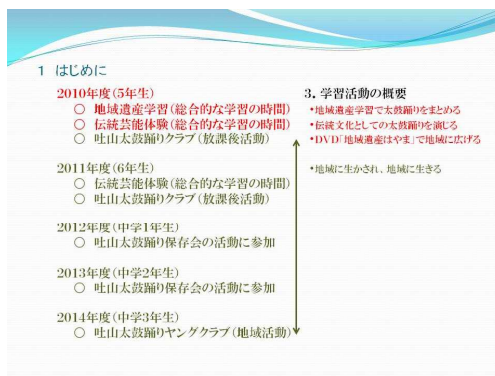
今春、太鼓踊りクラブを卒業した子どもたちが中学生になるのを機に、「吐山太鼓踊りヤングクラブ」を組織した。小学校で最初に太鼓踊りを習った子どもは、すでに30歳を過ぎた。しかし、残念ながら誰一人として保存会の活動に参加していない。ヤングクラブは、社会人になるまでの子どもたちを伝統文化の継承者として育てることを目的とした自主組織である。

「吐山太鼓踊りヤングクラブ」発足の出発点は、4年前に遡る。伝統芸能体験活動から伝統文化継承活動へのターニングポイントになった2010年度5年生の取組から稿を起し、今日までの歩みを紹介したい。

2. ねらい

(2010年度 第5学年 総合的な学習の時間)

- 吐山太鼓踊りの歴史を知る。
- 吐山の人たちのくらしと太鼓踊りの関わりを理解する。
- 吐山太鼓踊りの歌と踊りを習得する。



2 ねらい

2010年度 第5学年 総合的な学習の時間

テーマ 地域遺産学習

ねらい(太鼓踊りに限定して)

- 吐山太鼓踊りの歴史を知る。
- 吐山の人たちのくらしと太鼓踊りの関わりを知る。
- 吐山太鼓踊りの歌と踊りを習得する。

3. 学習活動の概要

〈地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる〉

奈良市の世界遺産に関する研修の中で、「春日大社について知ることが大事なのではなく、神鹿とされたシカとともに生きてきた人々の喜びや悲しみ、それを守ってきた人々の営みを知ることこそが大事だ。」と言われた言葉が、今も脳裏を離れない。吐山小学校に異動した2010年4月、太鼓踊りを教わる子どもたちに、「太鼓踊りとともに生きてきた人々の喜びや悲しみ、それを守ってきた人々の営み」と出合わせたいと思った。それが、今回の取組の出発点だった。

まず、ユネスコを参考に、「地域遺産」を「地域みんなの宝物」「今までも、これからも変わらずに大切なもの」と定義し、「文化遺産」「無形遺産」「自然遺産」の3つに分けることにした。そして、地域遺産に登録する3つの基準(①吐山に住む人たちが大切にしてきた建物や芸術であること。②とてもめずらしく、大切な自然であること。③その文化や自然を吐山の人たちが守り、次の世代に伝える努力をしていること。)を作った。

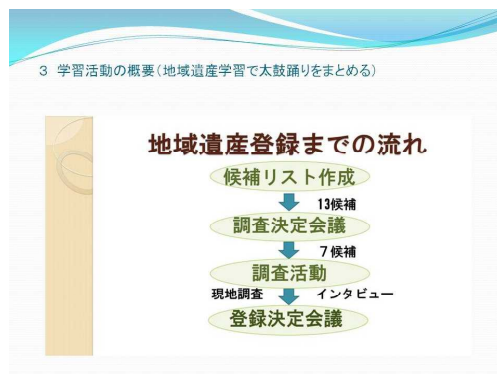
The image shows three presentation slides with a blue and white theme. Each slide has a title and content in Japanese.

Slide 1: 3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)
地域遺産とは
地域みんなの宝物
今までも、これからも、
変わらずに大切なもの

Slide 2: 3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)
地域遺産の種類
■文化遺産…建物、文化財など
■無形遺産…伝統芸能、祭りなど
■自然遺産…動物、植物、山など

Slide 3: 3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)
地域遺産の基準
1 吐山に住む人たちが大切にしてきた建物や芸術であること。
2 とてもめずらしく、大切な自然であること。
3 その文化や自然を吐山の人たちが守り、次の世代に伝える努力をしていること。

具体的には、地域遺産の候補リスト作成→予備調査→調査決定会議→調査活動→決定会議→まとめという流れで活動を組んだ。リスト作成時に13あった候補は、調査決定会議で7つに絞られ、それらについて調査活動を行うことになった。地域学習の本質は地域に生きる人との出会いである。10人の方に手紙を書いて、インタビューのお願いをした。そして、インタビューする内容を3つ以内にまとめる話し合いをして、準備した。現地調査も7回実施した。



3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)

7つの地域遺産

遺産名	種別
太鼓踊り	無形遺産
下部神社	文化遺産
春祭り	無形遺産
スズラン	自然遺産
ヒダリマキガヤ	自然遺産
貝ヶ平山	自然遺産
ハコネサンショウウオ	自然遺産

まとめのプレゼン作りでは、1遺産についてスライドを8枚にした。使用する写真を厳選させ、「話題提示・問題提起」→「説明・解説」→「まとめ・提言」といった論理性のあるストーリーを作るためである。



吐山太鼓踊りについて現存する最古の史料は、およそ300年前のものである。聞き取りは、昭和初期から戦後間もなくの話と、30年前の保存会結成から現在までの話に分けて、2回行った。その中で、娯楽のなかった時代には太鼓の練習で集まることが楽しみだったこと、必死の雨乞いの中で火災を起こす惨事があったことなど、記録誌には載っていない歴史を知った。保存会の方の話からは、小学生への期待の大きさを感じた。



3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)

太鼓踊りは2つに分かれる

砂持ち 雨乞い 千燈明
ダケノボリ いさみ踊り

雨に感謝
太鼓踊り

3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)

太鼓踊り300年の歴史

300年前 太鼓踊り始まる → 100年前 今の形になる
↓
60年前 戦後に伝える
↓
20年前 保存会の結成



3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)

太鼓踊り保存会の活動

若い人に踊りを伝える → 結成前 歌本 衣装 発表会
↓
結成後
毎月の練習会
秋祭りに発表
小学生に教える



3 学習活動の概要(地域遺産学習で太鼓踊りをまとめる)

くらしの一部
↓
伝統文化として



〈伝統文化としての太鼓踊りを演じる〉

太鼓踊りが今日まで伝えられてきたのは、近年に至るまで、水不足に苦しむくらしぶりが存在したからに他ならない。それへの理解抜きに太鼓の叩き方を学んでも、太鼓踊りを識ったことにはならない。古老から借り受けた近世文書に刻まれた墨文字を子どもたちに引き寄せたい。――映画作りの原点はそこにあった。

昭和10年の雨乞いと昭和22年の太鼓踊りの記録や聞き取りの記録をもとに、映画のフレームワークを決めた。夏休み前に配役を決め、休み中に子どもたちの顔を思い浮かべながらシナリオを書いた。2学期になると、地域に出かけてロケを行った。子どもたちは、精一杯演じた。演じることで、先人の水への思いの幾らかを体感できたように思う。こうして映画「雨たんもれや」が完成した。「雨たんもれや」は、雨乞いのダケノボリの際、

3 学習活動の概要(伝統文化としての太鼓踊りを演じる)

75年前の
池田家

奈津江 45才
等太郎 48才

利枝 20才 樹太郎 24才 清子 15才 明子 12才



岳山の上で男たちが連呼した「雨を降らせてください」という意味の言葉だ。

■子どもたちの熱演に驚かされ、その成長を感じることができ、胸が熱くなる思いでした。それと同時に、各々の場面で映し出される吐山の自然の美しさが印象的で、あらためて自分たちの住んでいるこの土地の良さを再確認させてもらえる、「吐山の地域遺産」というテーマにふさわしいすばらしい映画でした。吐山太鼓踊りを学んでいくだけでも有意義だと思いますが、それに加えて、それにまつわる言い伝えを自ら演じるということで、一層踊りそのものを子どもたちが自分のものにしていくことができ、より深く何かを感じていけるすばらしい授業であったと思います。…(2011.1 保護者)

映画のラストシーンは、子どもたちに話しかける古老の台詞で結んだ。「私は女やから、太鼓は叩いたことない。そやけど、男の人と同じように日照りの心配をして、弁当を作って男の人をダケノボりに送り出し、祈るような気持ちで太鼓の音を聞いていた女のもんにとっても、太鼓踊りは生活の一部やったんや。吐山に田んぼがあり、米作りが続く限り、忘れたらあかんし、絶やしたらあかん、『心』やと思う。山あい田を開き、ため池を造って水を引き、たびたびの日照りとたたかいながら、田を守り、暮らしを支えてきやはった。吐山の米作りの一部分として、太鼓踊りがあったのやで。太鼓踊りを伝えていくということは、単に踊り方を伝えるんやない。吐山の人たちの暮らし、もっと言うたら、吐山の『心』を伝えていくことや。そのことを、よう覚えといてや。」



この後に約6分の映像あり

〈DVD「地域遺産はやま」で地域に広げる〉

DVDに収録して地域の人たちに広める。――これが私たちの総合学習の「ゴール」だ。プレゼン「吐山の地域遺産」(35分)と映画「雨たんもれや」(40分)を、「地域遺産はやま」として1枚のDVDにまとめた。

DVDは50枚作成し、お世話になった方たちにもらっていた。その後、地域からの要請でさらに180枚焼き増すことになった。「吐山に住んでいながら知らなかったことを教えてもらった」「自分たちの住んでいるこの土地の良さを再確認させてもらえた」という声が、子どもたちを励ました。「おばさんにあいさつしたら、『〇〇役をしていた子やな。』と言われた。」と、うれしそうに語る子もいた。子どもたちは、地域に生かされている。

〈地域に生かされ、地域に生きる〉

本校では、5・6年生が総合の時間に保存会の方から太鼓踊りを教わり、1月の参観日に発表会をしている。また、太鼓踊りクラブの子どもたちは、大人たちとともに秋祭りに神社で踊りを奉納している。総合の活動の影響もあり、この年の5年生の子どもは例年以上の割合でクラブに参加していった。月に1度の練習は7月から始まり、地域の人たちの厳しくも温かいまなざしが、子どもたちを包んでいた。

■私は、秋祭りで太鼓をたたいたことによって、分かったことがあった。それは、自分たちが、昔から受けつがれてきた太鼓踊りを受けついでいるということだ。吐山の伝統を受けついでいるというのは、うれしいことだと思った。



(2010.11 夏子)

地域の人たちの思いに触れた子どもたちは、太鼓踊りを習っていることは「吐山の伝統を受け継いでいる」ことだと捉えるようになった。その後、1月の参観日、6年生10月の市音楽発表会、11月の秋祭りに太鼓を叩いた。そして、最後の発表の場となった1月の参観日を終えた子どもたちは、日記に次のように書き留めた。その目は、いつしか伝統を「受け取る」側から「受け渡す」側になっていた。

■太鼓踊りって楽しいという気持ちも、5年生に伝わったかなあと不安ですが、この「太鼓踊り」をついでいってほしいです。太鼓踊りは吐山の宝だと思います。(2012.1 梨恵)

■太鼓踊りは今日で最後です。今までを思い出すと泣きそうになりました。5年生もぼくたちみたいにうまくなってほしいです。そして、太鼓踊りはずっと残っていてほしいです。今日はとても思い出に残るような日でした。

(2012.1 心)

2012年、10人は中学生になった。機会があればまた太鼓を叩きたいと書き残して卒業していった子どもたち。その好機は偶然に、そして意外なほど早く訪れた。

太鼓踊り保存会に対して、7月に行われる県のイベントへの参加要請があった。会議では、太鼓は3台で内1台は子どもが叩くことが決まった。小学生の後継は育ておらず、打診を受けた私は中学生に協力を求めた。そうして、3人の子どもが大人に混じって太鼓を叩いた。さらに、地域からの誘いを受けて6人が毎月の練習に参加するようになり、秋祭りの奉納に加わった。中学生の秋祭り参加



は初めてのことであった。

■この太鼓踊りを通して日々地域の方々の交流が深まっていく中で、ぼくたちは太鼓踊り同様に地域の方々に守られていると感じました。(2012.8 等和)

2013年、中学2年になった男子生徒3人は、練習用DVD撮影で模範役を務めるほどの存在になっていた。2014年1月には、太鼓踊りクラブの小学生とOBの中学生の混成グループで、「第1回 つながろう！奈良県学校コミュニティの集い」に出演した。こうした先輩のうしろ姿が、小学生を育ててくれた。2つ後輩になる子どもたちは、積極的に太鼓踊りクラブに参加した。私は、この子たちとはクラブだけの付き合いだが、何人かの子は卒業後もやりたいと言うようになった。中学生の組織化を真剣に考え出したのは、この頃のことだ。

2014年4月、保存会総会で「吐山太鼓踊りヤングクラブ」が承認され、私は当面の連絡役を担うことになった。3年生は受験勉強等で欠席が続いているが、現在4人の1年生が毎月の練習に顔を見せてくれている。部活動で疲れ切った土曜日の夜、「しんどい」と言いながらも太鼓に向かう姿は、実に頼もしい。伝統芸能の後継者不足が深刻な当世、彼らの存在が一筋の光明に思える。

地域遺産学習でお世話になった方の幾人かは故人となられ、或いは病で自由を失われた。子どもたちはそうした方たちの歴史をも受け継ぎ、地域に生きる一步を踏み出したのだと感じる。そして、その子たちを見る地域の目のなんと優しく温かいことか。今、吐山の伝統文化「吐山太鼓踊り」継承の小さな歯車の1つが、静かに回り始めた。

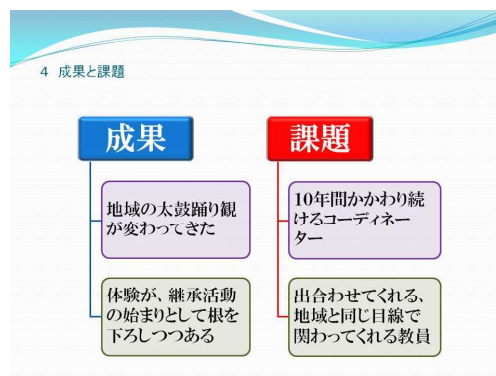
4. 成果と課題

今回の取組の何よりの成果は、地域の太鼓踊り観が変わってきたことである。伝統芸能の保存活動は、一般論としては賛成だが当事者にはなりたくないと思う人が多いものだ。それがなくなったというわけではない。しかし、太鼓踊りを「誇るべき伝統文化」「地域遺産」といったフレーズでポジティブに語られる場面が、間違いなく増えた。検証の術もないが、DVD「地域遺産はやま」による発信と、「吐山太鼓踊りヤングクラブ」発足に至る子どもたちの歩みが地域に与えたインパクトは、相当大きいと感じている。

子どもについて言えば、太鼓踊りを教わるという体験が、継承活動の始まりとして根を下ろしつつあることが1番の成果である。太鼓踊りクラブに所属する子どもたちの何人かは、卒業後のヤングクラブを今から心待ちにしている。

今後の課題を考えるにあたり、私の立ち位置を整理しておきたい。現在、私は母校に勤務している。太鼓踊り保存会役員の方たちとも、当然顔見知りである。地域学校連携担当として太鼓踊りクラブの活動に参加しているが、地域から見れば私も保存会の一員だ。こうした特殊性を踏まえると、次の2点が次年度以降の課題である。

学校と地域を繋ぎながら10年間かかわり続けるコーディネーターが存在すること。10年間というのは、小学校を卒業した子どもが大学を出て、社会人になるまでの年数である。ヤングクラブで活動した子が、社会人として太鼓踊り保存会に加わるところまで見届けるには、少なくとも10年は必要だ。その間に、ヤングクラブを自主運営できる子ども



を育てたい。

学校には、伝統文化としての太鼓踊りに出
合わせてくれる教員、太鼓踊り保存活動に地
域と同じ目線で関わってくれる教員が欠かせ
ない。「地域学習」「連携」の真価が問われる
のは、これからである。

